桜美林大学　大学教育開発センター
Newsletter
No.24
J.F.Oberlin Faculty Development Center Newsletter
2017年9月30日

Contents ▶
1 〈公開シンポジウム〉FDのさらなる発展を目指して―学生FD活動について考える―報告　2 桜美林大学・大正大学合同フォーラム―大学職員のあるべき姿を考える―報告　3 学生FDサミット2017夏（於・金沢星稜大学）参加報告　4 武蔵野大学におけるクォーター制（4学期制）の運用について―視察報告―　5 活動日誌

1 〈公開シンポジウム〉FDのさらなる発展を目指して―学生FD活動について考える―報告

大学教育開発センター長
心理・教育学系／大学アドミニストレーション研究科　教授　鈴木　克夫

去る9月12日（火）、町田キャンパスにおいて大学教育開発センター主催の第18回公開シンポジウムが開催された。テーマは、「FDのさらなる発展を目指して―学生FD活動について考える―」である。学生参加型の教育改善方策の導入は喫緊の課題の1つである。学生自身が求める教育改善の課題に学生が主体となって取り組む活動を「学生FD」と名付け、その活動を学生とともに進めるFDとして大学が支援する方式を確立したのは立命館大学が最初で、その後、学生FDは全国の大学に普及している。このシンポジウムでは、立命館大学で学生FDの実践を推進されるとともに、「学生FDサミット」等の活動を通じてその普及に尽力されてこられた木野茂元・立命館大学教授の基調講演に続き、パネルディスカッションでは、学生として活動に参加された経験をお持ちのお二人、ならびに現役の大学生を加え、今後の学生FDの方向性について議論が行われた。

参加者は72名（パネリストおよび大学教育開発センター研究員を含む）で、内訳は、学外36名、学内36名であった。また、参加者の職位は、教員25名（34.7%）、職員35名（48.6%）、学生11名（15.3%）、その他1名（1.4%）である。日本大学で学生FD活動に参加している学生3名の他、桜美林大学の在学生が複数参加したことも特筆される。

木野茂氏（元立命館大学教授）による基調講演「学生FDのすゝめ」では、まず、①授業や教育の改善に関心を持つ学生であること、②学生自身が主体的に取り組む改善活動であること、③目的を共有する大学教職員との連携を求めること、という「学生FDの三原則」が示された。学生FD活動は2006年に立命館大学で始まり、2009年の第1回学生FDサミットから全国に広がり、今夏の金沢星稜大学まで15回開催されている。学生FDには決まったモデルはなく、それぞれの大学に適した方法で行えばよいが、他大学の活動から学ぶことは多く、学生FDサミットがその絶好の機会であるとの紹介があった。また、全国の学生FD団体および支援教職員を対象に行ったアンケート調査（2015-16年実施）の結果からは、教育改善はもちろん、学生スタッフの成長や一般学生の関心喚起が学生FDに期待されているという指摘があった。続いて、平野優貴氏（法政大学職員、元立命館大学学生FDスタッフ）からは、自身の経験から、学生目線の「学生FD」と職員目線の「学生FD」について提言があった。また、曽根健吾氏（元東洋大学学生FDスタッフ、元関東圏FD学生連絡会学生代表）からは、自大学での取り組み、ならびに大学間連携による取り組みから見えてきた課題とともに、これからの学生FD活動6箇条が提起された。最後に、白井誠也氏（桜美林大学リベラルアーツ学群3年）からは、自身が授業改善や学生生活に関心を抱くきっかけとなった授業体験から、学生FD活動に対する期待と要望が示された。田中一孝氏（桜美林大学リベラルアーツ学群講師）の司会によるパネルディスカッションでは、会場からの質問に丁寧に答えるとともに、会場の参加者も加わり、活発な議論が行われた。

本学では、まだ学生FD活動は実施されていないが、参加した教職員ならびに学生には大きな刺激になったのではないか。終了後も多くの教職員と学生が会場に残り、熱く語り合う姿にその胎動を感じた一日であった。

なお、このシンポジウムは、大学コンソーシアム八王子による後援、ならびに麻布大学、恵泉女学園大学、大正大学、明星大学、和泉短期大学の協賛を得て実施されたことにこの場を借りて感謝申し上げたい。また、2018年3月に刊行を予定している『年報』（第10号）で、このシンポジウムの詳細な報告を掲載する予定である。

2　桜美林大学・大正大学合同フォーラム―大学職員のあるべき姿を考える―報告

大学教育開発センター長
心理・教育学系／大学アドミニストレーション研究科　教授　鈴木　克夫

桜美林大学と大正大学による合同フォーラム「大学職員のあるべき姿を考える―10年後、価値ある大学をめざして―」が、8月5日（土）、東京・巣鴨の大正大学5号館で開催された。

桜美林大学大学院の大学アドミニストレーション研究科と、大正大学の人間学部教育人間学科教育・学校経営マネジメントコースは、ともに大学職員（大学アドミニストレータ―）を養成するという共通の目標を持つことから、教育・運営面での連携に関する協定が結ばれている。このフォーラムはその一環で開催されたもので、NPO法人学校経理研究会および桜美林大学大学教育開発センターが共催した。両大学の在学生、卒業・修了生のほか、全国から50名を超える大学職員が参加した。

大塚伸夫大正大学学長による開会挨拶、鈴木克夫桜美林大学教授および山本雅淑大正大学教授による両コースの概要紹介に続き、両大学の在学生および卒業・修了生、合計4名による研究発表が行われ、粂川二郎大学教育開発センター研究員が、大学アドミニストレーション研究科在学生として研究発表「学修の動機づけ支援という視点―モバイルアプリを利用した学修時間の可視化―」を行なった。

シンポジウムでは、まず山本眞一桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科長から、大学の教職員数の日米比較に基づく日本の大学職員の役割と課題について提言があった。続いて、篠田道夫桜美林大学教授からは、SDの義務化よりも大学職員の役割や位置づけを高めることの方が重要であること、上杉通世大正大学理事長特別補佐からは、大学は一般企業に比べて部署間の連携がなくタコ壺化しており、そこからの脱却が課題であるとの指摘があった。

また、両大学の卒業・修了生からは、大学職員の業務の現状と課題について発言があった。さらに、ファシリテーターである山本雅淑教授の進行により、10年後、価値ある大学作りをしていくために職員はどのように動くべきかについて、フロアーの参加者の質問や意見が多数引き出された。

なお、来年は桜美林大学を会場に開催される予定である。

3　学生FDサミット2017夏（於・金沢星稜大学）参加報告

大学教育開発センター FD/SD部門　研究員
人文学系／リベラルアーツ学群　講師　田中　一孝

2017年8月31日、9月1日に金沢星稜大学にて開催された「学生FDサミット2017夏」に参加しました。学生FDとは大学の授業改善を、大学機関や教職員の立場からではなく、学生が彼らの目線から主体的に行っていく活動を指します。我が国では岡山大学が学生･教職員FDの委員会を立ち上げたことがこうした活動の先がけの一つとされ、2007年には立命館大学が学生FDスタッフを募集・組織化し、以後こうした応募形式による学生FDの組織化が全国的に広まっていったそうです。「学生FDサミット」は、学生FDを実施している全国約60大学の成果報告・発表のための集まりです。年に2回開催され、各大学の学生が互いの活動を学び合い、日本の高等教育の課題を議論する場ともなっています。本学では、9月12日に学生FDをテーマにした公開シンポジウムを開催いたしましたが（pp.1-2参照）、その直前の準備のための調査・視察もかねての参加でした。

今回開催された学生FDサミットのテーマは「みんなで考える理想の授業～温故知新！学生FDの今昔から～」というものでした。初日にはまず講演会が実施され、福井大学の鎌田康裕氏から「～大学を学びながら遊ぼう～」という主題で、鎌田氏が金沢大学の学生時代に関わった学生参加型授業の企画･立ち上げについてのお話がありました。学生参加型授業とは、学生たちが学びたい授業を学術的な意義を担保しながら、学生たち自らが企画実施していく取り組みのことです。鎌田氏は他の学生たちとともに、教職員と密にコミュニケーションを取り、授業の運営にも積極的に関わったそうです。新しい授業の企画運営はたいへんだが、仲間の学生との協働には他のものでは得がたい楽しさもあることを強調していました。実際の授業は大講義室に学生が座りきれないほど盛況だったそうです。

初日の講演後、そして2日目の時間の大半は「しゃべり場」と題した、グループディスカッションとプレゼンテーションのワークショップに費やされました。今回のしゃべり場のテーマは「みんなで考える理想の授業」であり、鎌田氏の講演を踏まえ、今回集まった学生・教職員たちで理想の授業のシラバスを模造紙で作成し、それを発表するというものでした。このワークショップは単に好きな授業を一から作るというものではなく、「地域」「地域連携」「自校理解」などの内容をシラバスの中心に据えることが求められており、昨今の高等教育の重要な課題に沿う形でデザインされていました。私も学生とともにシラバスづくりに参加しましたが、学生たちは教育改善への関心が非常に高く、学生サミットで経験したことを自校に持ち帰って活かそうというという熱意を強く持っていました。学生FDの経験者は社会に出た際、大学教職員あるいは教育関係者として働く方も少なくないと聞きます。将来、こうした学生たちが我々と共に大学を運営していくことを想像すると、とても頼もしく思いました。

今回のサミットは37の大学から計212名の学生･教職員が参加しましたが、開催校の金沢星稜大学のスタッフの学生の運営が素晴らしく、会場全体が一体感を持っていたのが印象的です。私のような初参加の者でもアットホームな雰囲気でざっくばらんに議論をすることができました。非常に多くの参加者と彼らの熱量は特筆に値しますが、これが首都圏の開催となると数百人規模の集まりとなるそうです。次回は法政大学での開催です。学生FDサミットにご興味のある方は、ぜひご参加ください。そこには大学教育の改善につながる多くの気付きがあると思います。

4　武蔵野大学におけるクォーター制（4学期制）の運用について―視察報告―

大学教育開発センター FD/SD部門　研究員
教育支援課　佐藤　誠治

訪問目的

2013年4月から大学設置基準第23条が改正され、その後いくつかの大学でクォーター制を中心とした柔軟なアカデミック・カレンダーの運用が広がり見せた。このような先進的な取り組みに関する調査は、本学の今後の方向性を検討する際にも参考になると思われ、特に私立・同規模大学での取り組みが参考となると思われる。近年、学期制の運用について先進的な取り組みを行っているのが武蔵野大学であり、2017年7月11日にクォーター制に関する訪問調査を行った。

武蔵野大学では2015年度からクォーター制を導入しており、昨年度には全学的に適用している。取り組みの成果や課題について、武蔵野大学事務局長山田英昭様、事務部学務課部長落合恒様、課長和賀信之様にお聞きした。本学からは、鈴木克夫センター長の他、教育支援課員3名で訪問した。

クォーター制導入の目的

導入目的は①「グローバルに活躍できる人材の育成」、②「より高い学習効果」が主である。グローバル社会で活躍する人材育成のために、4学期のうち、第2学期には必修科目を可能な限り配置せず、海外語学研修プログラム等に参加しやすくするなどの工夫を行っていた。また、1学期が8週間で完結され、履修登録上限単位数が定められていることから、履修科目数が減少し、集中的な学びによる効果的な学修を行えるような仕組みを整えている。

クォーター制導入の効果と今後の課題

クォーター制導入におけるメリットの一つが、学生の授業への理解が深まっていると思われる兆候が見られたことである。学期制変更の前後で同一科目の平均GPAを比較したところ、クォーター変更後の方が高い数値となった科目が一部あったとのことである。科目の特性にもよるが、短期間での学修が一定の教育的効果が得られることを示唆している。

一方、課題は完全なクォーター制での運用の困難さであった。例としては語学科目等の非常勤講師への依存度が高い科目についてはセメスターで開講せざるを得ず、学外学習の学期と定めている第2学期にも必修科目を配置せざるを得ない場合があるとのことであった。

今回の訪問を通して、従来からのセメスター制下の仕組みとクォーター制を効果的に結びつけていく方法を検討していく必要があると感じられた。

5 活動日誌

・7月11日（火）武蔵野大学有明キャンパス訪問（研究員2名）
・8月 5日（火）桜美林大学・大正大学合同フォーラム開催（於・大正大学）（研究員3名）
・8月23日（水）・24日（木）第7回大学コンソーシアム八王子FD·SDフォーラム参加（研究員1名）
・8月31日（木）・9月1日（金）学生FDサミット2017夏（於・金沢星稜大学）参加（研究員2名）
・9月12日（火）第18回公開シンポジウム開催（研究員13名）

＜第2回 桜美林大学・明星大学 合同ゼミ＞のご案内

桜美林大学と明星大学との大学間交流を目的として、昨年度から大中真准教授（桜美林大学リベラルアーツ学群／大学教育開発センター IR部門研究員）と勝又基教授（明星大学人文学部）とによる合同ゼミ（課外活動）の試みを始めましたが、今年度は桜美林大学（町田キャンパス）を会場として第2回を実施しますので、お気軽にご見学ください。

日　　時：2017年10月21日（土）14：00～17：00
場　　所：桜美林大学（町田キャンパス）太平館A201
プログラム：明星大学勝又ゼミ学生発表（約60分）
桜美林大学大中ゼミ学生発表（約60分）
質疑応答（約50分）
後　　援：明星大学地域交流センター、桜美林大学大学教育開発センター

昨年10月に開催された第1回合同ゼミの模様（於 明星大学）

編集発行：桜美林大学 大学教育開発センター
〒194-0294 東京都町田市常盤町 3758　其中館1階 101
E-mail：fdcenter@obirin.ac.jp　Web：http://www2.obirin.ac.jp/fdcenter/